



# 経営の散歩道

川中経営研究所  
所長 川中清司

▼植物人間がいま、自分で車イスをこいでナース室にきた。看護婦たちは歓声をあげ手を取りあい、泣いて喜んだ。  
医師が見はなした重症患者への必死のリハビリが、ようやく実をむすんだのだ。

六月初旬にNHKが放映した札幌麻生脳神経外科病院の記録は、多くの人に感動を与えた。

四人がかりで風呂にいれ、棒のように硬直した手足をほんの少しずつ曲げのぼししながらほぐす。

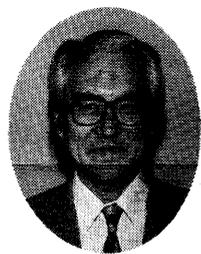
スプーンの先ちよつびりの流動物を「さあ、たべようね、おいしいよ」と励ましながら歯の間からさしこんでいく。

そんな機能回復の涙ぐましい努力が人間を蘇らせた。  
▼いらなくなるとポイ。間に合わないものは捨てる。即効性だけを求めるインスタント時代。

モノへの便利さから、いつの間にか人に対する考え方までが、間に合わなくなったら見捨てる。風潮ができてしまった。

病む親は病院まかせにしてカセギに忙しい。危篤を知らせてもかけつけて来ない。臨終を見守る肉親もへつてきた。

友人のA医師—六四才—の話では、遺体も、長時間引きとりに来ない者が増えてきたらしい。「ひどい世の中になつたもんだよ、まったく」と眉をひそめる。  
▼人間は便利さと即効性を追い求める。科学の進歩もそこにある。



## 第四十九回

### よみがえる人

しかしその代償に、生きるために必要な「情緒と安心」が奪われていく。  
東京はたしかに便利な街だ。

だがそこに住む人々にも失われていく「心のゆとり」への不安がただよう。

▼去年の夏、東京のある団体の職員数十人から「東京に住む良い点・悪い点」のアンケートをとった。

「情報が豊かで早い」、「文化に接するチャンスが多い」がトップで六三％。次に「交通網が発達し便利」が五一％をしめ、

「都会的センス・刺激がある」というのが多い。要するに「暮らすには便利だ」ということだ。反対に「人があふれて多すぎる」が五三％、「交通渋滞と通勤ラッシュ」四八％などのマイナス面につづき、「会社人間ばかり」で「人と人とのつながりがない」とか「自分を見失い流される不安」などの、人間性へのインセキユアー（不安）を訴えるのが半数近いのに驚いた。  
▼生産性だけを人間の活動目標に置くと、とんでもない過ちを

おかすことになる。  
たしかに効率を追い利益をあげなければ企業は成り立たないし、サラリーも払えない。

しかし利益はあくまで幸せのための手段でしかない。金をもうけて幸せをつかむことが目的だった苦なのに、いつの間にか金をもうけることが目的にすり変ってはいないか。

▼経営者は収益性だけで社員を評価していないか。  
業積を伸ばせば「大した奴だ」と人物までも認め、逆に上らなければ「あいつはダメだ」とさ

げすんではいけないか。その人間性まで。  
▼人間好きで、部下の成長を信じていて、隠れた底力が十分に発揮できるようにしむけていくそれが上に立つ者の器（うつわ）というものだ。

リーダーシップは二本の綱から成る。一本は職権、いま一本は上司の人格的背景といわれている。すぐれた人間性をもつ上役のもとには弱卒はいなくなり、仕事を越えたほのぼのとした世界が生まれる。

▼人は自分を信じ導いてくれる者のために、命までも捨てる。

一世紀もの間北陸を支配した一向一揆は、老人から乳飲み児まで部落ごと皆殺しにされてもなお権力武士を相手に敢然と死闘を続けた。その農民パワーの原動力は何だったのか。一向宗門徒のリーダーや土豪の、単なる人心操縦のテクニクだけではなかった筈だ。

その根底には宗祖・親鸞が説いた「悪人正機」への絶対信頼がある。人間の煩惱や罪惡のすべてがそのまま許され、極悪悪人こそなお救われる、と言いつつた人間愛が輝いている。

▼即効と利益だけを求め、生産性を看板にして走りつづけてきた「日本株式会社」は、いま人間の反省点にさしかかっている。